

小学校における教員の笑いに対する意識
～小学校教員へのアンケート・インタビューを通して～

京都教育大学大学院 連合教職実践研究科
教職実践専攻 生徒指導力高度化コース
126054 森泰紀

小学校における教員の笑いに対する意識

森 泰紀

生徒指導力高度化コース

要約：笑うことは良いことだという考えが昔からある。それを証明するように、近年、笑いの効果についての研究が多く見られる。しかしながら、学校現場において笑いが研究されることは少なかった。本研究では、小学校教諭の笑いに対する意識を、アンケート・インタビューを通して調査した。多くの教師が、学校における笑いを肯定的に捉えていた。一方で、笑いが悪い影響を与えることを懸念する声がみられた。教師は授業を上手に進め、子どもたちの人権を守った上で、笑いを上手く利用し学級経営を行っていく必要がある。経験の浅い教師は、学級で笑いをコントロールできない傾向がある。しかし、子どもたちが自主的な生活を送ることを支援するために、笑いのデメリットにばかり目を向けずに、メリットを活かすことができるように、笑いを恐れずに活用する必要があるだろう。笑いを教育活動のスパイスとして、活かすことが重要である。

キーワード：笑い ハイリスク・ハイリターン

メリット・デメリット 教員歴 スパイス

第一章 はじめに

学校では、たくさんの子どもたちの笑顔に出会うことができる。授業、休み時間、放課後に関わらず、子どもたちの笑顔が私に元気をくれる。一方で、子どもたちも笑わないときがある。緊張しているとき、悲しいとき、教師に叱られているとき。さまざまな状況があるだろう。その中で、子どもたちが一切笑わない学校生活があるとするならば、それは、苦しく、さらには退屈に違いない。その状況を想像した時に笑いの重要性を感じた。授業の導入において、多くの教師が笑いを取り入れたり、笑いの中でコミュニケーションをとったりしていることからそのことがわかる。しかし、学校で起きる笑いについての研究をあまり目にしない。そこで、小学校教師の学校における笑いの意識を調査し、小学校における笑いの実際について考察したい。

第二章 研究の背景と目的

第一節 笑いとは

小学校における笑いの影響を整理する前に、笑いとは何かを検討する。笑いという言葉一つをとっても、人それぞれに笑いの解釈が違う。いわゆる、お笑い芸人が行うようなギャグのようなものを見て笑うこともあれば、子どもたちのかわいい姿を見るだけで笑ってしまうこともある。このことから笑いにはさまざまな種類があることがわかる。では、笑いにはどのような種類のものがあるのだろうか。

志水ら(2009)は主に笑いを以下のように分類した。

- ① 本能充足の笑い：食事がおいしかった満足感などからくる笑い
- ② 期待充足の笑い：優勝したときなど、期待がかなったときにでる笑い
- ③ 優越の笑い：長者番付の上位になった時にでるような、優越感をもつ笑い
- ④ 不調和の笑い：意外なことが起きたときにおこる笑い。社会常識との不一致や矛盾が起きた時に起こる笑い。ユーモアからくる笑いが、この笑いにあたる
- ⑤ 価値逆転・低下の笑い：夏目漱石の「吾輩は猫である」では、本来人間より価値の低いと思われている猫が、人間を見下してそのおろかさを笑うという点におもしろさがある
- ⑥ 協調の笑い：挨拶を行うときに、「こんにちは」と言って行う笑い
- ⑦ 防御の笑い：他人に自分の内面を知られたくないときなどに笑みを浮かべる笑い
- ⑧ 攻撃の笑い：人の失敗や欠点、不道德を笑うもの
- ⑨ 価値無化の笑い：待ち合わせに遅れて「すまん すまん」というときに浮かべる笑い
- ⑩ 緊張緩和の笑い：緊張がゆるんだときの笑い

このように笑いにはさまざまな種類のものがあるが、対人関係における影響という観点でみれば、笑いは大きく二つに分けることができる。井上(1984)は、笑うことで互いの緊張をとき、笑いを共有し合うことで親密感を深めるような相手への親和を表す「協調としての笑い」と、笑った方が勝利を手にすることで優越感に浸り、笑われた方が敗者となってみじめな思いをしなければならぬ、という笑いの人を攻撃する性質を利用した「攻撃としての笑い」と述べている。

第二節 笑いの先行研究

「笑う門には福来る」、「笑いは百薬の長」という言葉があるように、笑うことは良いことだという考えが昔からある。それを証明するように、近年、笑いの効果についての研究が多く見

られるようになった。哲学、心理学、社会学、文学、人類学、言語学、医学など、人間の意識活動と身体活動の両面にわたって、研究がなされている。

教育分野において、大崎ら(2011)は、「笑顔とユーモラスな行動は、コミュニケーションの第一歩として、子どもに親近感を与え、授業内の発言や教師に対する遠慮からくる緊張感を取り除くことができる」と述べている。また、中島(2007)が行った実験によれば、男女高齢者に寄席を見る前と後で「かな拾いテスト」を行わせたところ、32人中24人が、寄席を見て笑った後のほうの正答率が高いことが分かった。白石(2012)は、予備校の教室における笑いの重要性を述べている。その中で、特に、低学力群のクラスにおける笑いの重要性を強調している。

第三節 先行研究から推測可能な学校での笑いの影響

授業面でみれば、第二節で述べたとおり、笑いは成績の向上に繋がることが推測される。

生徒指導面でみれば、第一節で述べた「協調としての笑い」と「攻撃としての笑い」が、学校教育の中の発生した場合、メリット・デメリットが生まれるだろう。なぜなら、「協調としての笑い」は友だちや教師と親和を深めるという効果がある一方で、「攻撃の笑い」は、人権を侵すことが推測される。

このように、教育を行うに当たって、生徒指導・授業の両側面で、笑いが効果的であることが推測される一方で、悪い影響を及ぼすことが懸念される。

第四節 本研究の課題と目的

上述の通り、教育界における笑いの効果は、さまざまな先行研究から推測することができる。私が知る教師たちは口をそろえて、学級の中で笑いを取り入れることは重要だと言う。笑いを起こすことによって、教師への信頼感を高めたり、学級活動を進めやすくなったりするといった効果を教師は肌で感じているからだろう。一方で、笑いを起こすことによって、学級経営を進めにくくなることも先行研究から考えられるが、笑いの悪影響に関してはあまり耳にしない。また、そもそも笑いをあまり取り入れていない学級もみたこともある。だが、その調査に関する研究もみられない。

以上のように、学校における笑いは、なんとなく学校に良いものだという印象を持つことはできるが、実際のところ教師がどのように笑いを捉えているのかを調査した研究はない。よって、本研究では、小学校教師が考える学校における笑いの影響を調査・検証し、考察を深める。

第三章 研究の方法

第一節 教員への「学級における笑いの影響」についてのアンケート調査

1、アンケート調査の対象と時期

京都市内の公立小学校教諭計 70 名（男性 31 名、女性 39 名、教員歴平均 12.16 年）を対象に、2013 年 11 月中旬にアンケートを実施した。

2、調査内容

本アンケートは、小学校における教師の笑いに関する意識を調査するものである。アンケート内容は、ページ数に限りがあるため、結果と共に記載する。また、アンケートに関する回答は、記述式を除き「そう思う、ややそう思う、あまりそう思わない、そう思わない」の 4 件法であった。

3、統計処理

4 件法の質問では、各回答に「1～4」の得点を付与した。それぞれの回答の平均値に統計的な差があるのかを検討するために、教員歴 10 年未満の教員と教員歴 10 年以上を比較する「T 検定」を行う。有意水準は、0.05 とする。

第二節 小学校教諭へのインタビューから考えた架空事例検討

学校における笑いの実態を研究するために、さまざまな小学校教諭から学級における笑いに関する話をお聞きした。その話を参考に、小学校で実際に起こりうる架空事例を作成し考察を深める。

第四章 アンケート調査の結果

第一節 アンケート内容および結果

第一項 学級における笑いの影響

「1. 学級経営を行うに当たって良い影響がある」および「2. 笑いは学級経営を行うに当たって悪い影響がある」という質問では、表 1 のような結果になった。

アンケートで回答した教師全てが、笑いが学級経営を行うに当たって良い影響があると回答した。一方で、悪い影響があると答えた教師は 16%であったが、84%が悪い影響はないという回答した。この結果から、学級において、笑いに悪い影響があると考えられるものの、多くの教

師が笑いに対して良い印象を持っていることがわかる。

良い影響として、「教室が和やかな空気になる」、「教師・児童、児童・児童とのコミュニケーションが取りやすくなる」、「新しい発想を出しやすい空気になる」や「学習が進みやすくなる」といった意見があった。

悪い影響として、「人権を侵す可能性がある」、「学級の統制ができなくなる」や「付和雷同の笑いはクラスの質を低下させる」といった意見があった。

表1 学級における笑いの影響

	そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない
1. 笑いは学級経営を行うに当たって良い影響がある	84%(59)	16%(11)	0%(0)	0%(0)
2. 笑いは学級経営を行うに当たって悪い影響がある	6%(4)	10%(7)	27%(40)	57%(19)

第二項 教師が意図的・非意図的に起こす笑い

「3. 学級において笑いを意図的に起こすことは可能だ」、「4. 学級に非意図的に笑いが起きるときがある」および「5. 学級の中で笑いを意図的に取り入れている」という質問では、表2のような結果になった。

多くの教師が学級において意図的に笑いを起こすことが可能である一方で、非意図的に笑いが起きることがわかる。また、非意図的には笑いは起きるが、81%の教師が学級の中で笑いを意図的に取り入れていることがわかる。では、非意図的に笑いが起きるにも関わらず、なぜ意図的に笑いを取り入れる必要があるのだろうか。それは、ここぞというタイミングで、多くの教師が学級の中で、良い効果を与えるために笑いを意図的に起こしているからだろう。記述式回答の中で、意図的に笑いを起こすタイミングはどのような場面か質問した。「授業の導入で子どもたちに授業に興味を持ってもらうために」、「クラスがだらけていると思った時」、「子どもたちが落ち込んでいる時」など、教師が子どもたちの授業・生徒指導面で有効な指導法として、笑いを頼りにしていることがわかる。

表2 教師が意図的・非意図的に起こす笑い

	そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない
3. 学級において笑いを意図的に起こすことは可能だ	47%(33)	44%(31)	9%(6)	0%(0)
4. 学級において非意図的に笑いが起きるときがある	43%(30)	46%(32)	11%(8)	0%(0)
5. 学級の中で笑いを意図的に取り入れている	46%(32)	34%(24)	19%(13)	1%(1)

第三項 笑いが起きた後に関する教師の意識

「6. 学級の中で子どもたちを笑わせすぎてしまったと感じたことがある」および「7. 学級の中で子どもたちが大笑いした後は、授業を再開させるまで時間を要する」という質問では、表3のような結果になった。

学級の中で教師の52%が笑わせすぎたと感じる一方で、48%がそうだと感じていなかった。また、子どもたちが大笑いした後に授業を再開させるのに時間を要すると感じた教師は44%、そう感じなかった教師は56%であった。質問7に関して、教員歴10年未満の教員と教員歴10年以上の教員に「T検定」を行ったところ有意差が見られた($t=-2.05$, $df=68$, $p<.05$)。この結果と平均値を見ると、教員歴10年以上の教員は教員歴10年未満の教員よりも、子どもたちが大笑いした後に授業を再開させるまで時間を要しないと解釈することができる。

表3 笑いが起きた後に関する教師の意識

	そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない
6. 学級の中で子どもたちを笑わせすぎてしまったと感じたことがある	26%(18)	26%(18)	30%(21)	18%(13)
7. 学級の中で子どもたちが大笑いした後は、授業を再開させるまで時間を要する	4%(3)	44%(31)	42%(29)	10%(7)

表4 質問7の回答の教員歴による差

教員歴	N	平均値	標準偏差	t値	自由度	有意確率(両側)
10年未満	37	2.4054	0.80	-2.05	68	0.044
10年以上	33	2.7576	0.61			

第四項 低学年、中学年、高学年で笑いが1番求められる学年

「8. 低・中・高学年の中で笑いが1番求められる学年」という質問には、表4のような結果になった。

本質問項目では、無回答および全てを選択した教師が多くいた。その理由として、「選ぶことができない」、「全ての学年で大事」というものが挙げられた。

有効回答の中では、低学年と中学年が同じ数だけ選ばれたが、高学年の選択肢が最も選ばれた。その理由としては、「低学年や中学年は何もせずとも勝手に笑っている」、「学年が上がるにつれて笑わなくなる児童が増える」や「思春期に入って気持ちが不安定になっているので、そのようなときこそ笑いが必要」といったものが挙げられた。

表5 低学年、中学年、高学年で笑いが1番求められる学年

	低学年	中学年	高学年
8. 低・中・高学年の中で笑いが1番求められる学年	26%(13)	26%(13)	48%(24)

第五項 教師の笑いに対する意識

「9. 学級の中で、児童に叱るよりも、児童と笑いあうことが多い」および「10. 笑いの良い面、悪い面を総合的に判断した上でも笑いは学級に必要な」という質問には、表6のような結果になった。

学級の中で叱る指導は重要だと言われている。それは、子どもたちに、人権感覚や規律を学ばせ、人としての生き方を指導するためには必須だからだ。だが、本アンケート結果では、教師が学級の中で、叱ることよりも児童と笑いあうほうが多いという回答が多かった。このことから、子どもたちに安心感や自主性を育てるために、叱ることよりも笑いあうことを多く取り入れていることが推測される。そして、教師が子どもたちと笑い合うことの重要性を感じていることがわかる。

全ての教師が、笑いの良い面、悪い面を総合的に判断した上でも笑いは学級に必要なと感じている。学級において、笑いは悪い影響があるという回答がみられたが、総合的にみると笑いは学級に必要なという教師の意識があることが明らかになった。教師が、悪い影響を鑑みても、笑いを必要だと判断しているということは、笑いには大きな信頼と期待が得られていると考えてもいいだろう。そうでなければ、否定の回答があるはずである。それぐらい、笑いは学級で必要とされていることがわかる。

表6 教師の笑いに対する意識

	そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない
9. 学級の中で、児童に叱るよりも、児童と笑いあうことが多い	21%(15)	62%(43)	17%(12)	0%(0)
10. 笑いの良い面、悪い面を総合的に判断した上でも笑いは学級に必要な	66%(46)	34%(24)	0%(0)	0%(0)

第六項 アンケート結果の総合考察

アンケートの結果から、教師は笑いに対して概ね肯定的な感情を持っていることが明らかになった。その一方で、少なからず笑いの悪影響を懸念する結果が示された。「人権を侵す可能性がある」や「学級の統制がとれなくなる」といった悪影響を感じている教師もいることが確認できた。また、教員歴10年未満の教員は教員歴10年以上の教員よりも、子どもたちが大笑いした後に授業を再開させるまで時間を要する傾向があることが明らかになった。

また、教師のアンケートから、授業中における適切な笑いとはどのようなものかを考えることができた。「子どもの心が傷つく」、「笑いすぎると授業として成り立たなくなる」や「長時間の笑いは子どもをだらけさせてしまう」といった意見から、『子どもの人権を傷つけないか

つ、短い笑い』が学級で求められていることが推測される。したがって、学級で意図的に笑いを起こすとしてもどのようにその笑いを終わらせるかといった着地点を踏まえて笑いを起こす必要があるのだろう。

第五章 架空事例と考察

教師へインタビューを行っている、笑いが学級にとって良い影響を与える一方で、悪い影響もあることが明らかになった。記述式のアンケートにおいても、「人権を侵すような笑いがある」や「授業を進めるにあたって、妨げになる場合もある」といった意見もみられた。アンケート解析の結果、教員経験 10 年未満の教員が教員経験 10 年以上の教員よりも、子どもたちが大笑いした後に授業を再開させるまでに時間を要すると考えている傾向があることが明らかになっている。

これらのことから、比較的教員経験が浅い教師は、学級経営を行うにあたって笑いをうまく取り扱えていないことが予想される。ただ、教員経験の浅い教師もこれからよりよい学級をつくっていくためには、笑いを良い形で取り入れることが必須であろう。

そこで、子どもたちにとって、悪影響がある笑いを取り除き、良い効果をもたらす笑いを享受できる環境を教師がつくるための参考になればと思い、教師へのインタビューをもとに笑いの架空事例を作成した。この架空事例を作成することが、教師から得た知識や技術の使い方を理解することに繋がると思う。

架空事例①：人権を侵す笑いを起こさないために

児童 A が何度も手を挙げ、教師に当てて欲しいがために、「はい！」と声を何度も張り上げていた。その都度、教師は「A さん、静かにしましょう。手を挙げるときは静かに挙げます。」と注意していた。注意した直後は静かに手を挙げるのだが、しばらくすると、また声を張り上げて手を挙げるが続いた。そこで、教師は、児童 A に次のように言った。

「あなたは、何度も同じようなことを言われて、なんでわからないのですか。幼稚園でも三回言われれば、わかりますよ。」

その言葉を聞いた他の児童は「A さん、幼稚園児だってー！」と言って笑い始めた。児童 A は笑われた後、手を挙げなくなった。

考察①：上記の事例は、教室内で起こりうる事例である。児童 A は、声を張り上げているが、

教師に当ててもらいたくてそのような行動を取っている。それを教師は、児童 A の行動を「手を挙げるときは静かにしましょう。」という言葉で片付けようとしてしまった。それに加え、「幼稚園児でも三回言われれば、わかりますよ。」と言ってしまった。それを聞いた他の児童は、「攻撃の笑い」に当たる、人権を侵す笑いをしてしまったと推測できる。教師に、人権を侵すような笑いを引き起こされてしまったのは、児童は教室に行くことがつらくなってしまうかもしれない。教師が、このような笑いを引き起こしてはいけないだろう。では、上記の事例のような行動を児童が取った場合、どのような対応が考えられるだろうか。

児童が何度も声を張り上げるようならば、教師が手を挙げる際のルールを作ればよいのではないだろうか。教師が「3 回大きな声を出して手を挙げれば、その人には当てません。」と宣言すればいいのである。さらには、その児童に当てる際に周りの児童に、本当に 3 回大きな声を出して手を挙げていないかを確認して、それで、その児童が嘘をついていたならば、そのルール違反を寛容な心で笑って「次は、本当に大きい声をださないな？」と確認して、授業を進めていけばいいのではないかと思う。

教師が学級の中で規律を整えていくときに、ついつい子どもの人権を無視してしまうときがあるようだ。しかし、教師が特定の児童を笑いの対象に仕向けてしまったのは、児童にとっての最後の砦がなくなってしまう。子どもたちの人権感覚が育っていくように、教師が子どもたちにとって悪い影響を及ぼす笑いを生まないように学級経営を行っていく必要があるのではないかと思う。

架空事例②：攻撃の笑いを阻止する教師の技術

算数の時間、その日は参観日であった。児童たちは偶数と奇数の復習を行っていた。教師が「3 は偶数ですか。奇数ですか。」という質問をした。児童 B が自信ありげに手を挙げた。その児童は、日頃から積極的に手を挙げる児童ではなく、参観日に手を挙げることはとても珍しかった。そこで、教師は児童 B を当てた。児童 B は「3 は偶数です！」と答えた。周りの児童は笑い、参観に来ている保護者たちはざわめきだした。教師はあわてた。そして、「なぜ、この子は偶数と言っているんだ？」と思った。ただ、ここで児童 B が笑い物になってしまったのは、これからの学校生活に支障を及ぼすかもしれないと考えた。教師はとりあえず、なぜそのような答えになったのかを児童 B に聞いた。児童 B は「3 は 2 で割りきることができる数字なので、偶数です！」と自信を持って言った。教師は、なるほどと思い、児童たちに「偶数の説明をしている教科書のページを開きましょう。」といい、偶数の定義を確認した。教科書には、「2 で

割り切れる整数を偶数、2で割り切れない整数を奇数といいます。」と書かれていた。みんなが教科書を見た後、児童Bは「3は2で割ると、1.5になるので偶数です。」と言った。教師は、教科書の定義に当てはまった意見をBさんが言っているので、「Bさんの言う通りなので、3は偶数です。」と言い切った。他の児童たちは「えー!!」と言い、保護者たちは、ざわめきが大きくなった。教師は、「教科書通りにしているBさんの解答は何が違うのですか。」と他の児童に聞いた。児童らが少し思案した後、「偶数か奇数かを判断するときに、ある数字を2で割った際、その答えを少数にしてはいけない。」という結論を出した。教師は「教科書の書き方に足りないところがあったので、教科書にみんなで結論付けたことを書き加えましょう。」と言った。さらには、「Bさんのおかげで教科書に足りないことを見つけることができたね。素晴らしい。ありがとう。」と言い、授業を進めていった。

考察②：今回の事例は算数であったが、他の授業でも同様なことがあるのではないだろうか。保護者から、さらには他の児童からも当たり前だと考えられるような答えを間違っている児童の事例である。児童Bは「3は偶数です!」と自信を持って述べたが、他の人たちから見れば、この回答は間違っている。しかし、もし児童が教科書の定義通りに答えていたならば、回答は間違っていない。これを教師が「違います。」と一蹴するのは簡単だ。しかし、児童Bは自信を持って答えている、かつ保護者が来ている状況で、教師がそのような対応をとれば、他の人たちに馬鹿にされ、児童Bは間違いなく悲しい思いをするだろう。かつ、児童Bからすれば教師が答えを間違えたことになる。そのような事態は防がなくてはならない。今回の事例は、教師に教科書の定義が頭にあって上で、問題を解決することができた。そして、間違った責任は教科書にあると収めた。これは、教師の冷静な判断と算数の知識が成せた技であろう。

この事例からわかるように、教師さえもが子どもを人権の笑いから守れなくなるケースがある。それを防ぐには授業研究を怠ってはいけない。授業研究を行い、授業力を向上させることが、子どもたちを攻撃の笑いから守る近道になると考える。

第六章 研究の成果と今後の課題

調査の結果から、教師は笑いに対して肯定的な考えを持っている一方で、悪影響について懸念を抱いていることが明らかになった。また、笑いをうまく取り入れることができればいいが、それに失敗した場合、授業・生徒指導がうまくいかなることが推測される。

以上のことから、笑いは、授業および生徒指導において「ハイリスク・ハイリターン」の性

質を持つことがわかる。上手く笑いを取り入れ、その笑いの方向を適切に処理することができれば、子どもたちと良いコミュニケーションをとることができ、子どもたちが学習に意欲を持って取り組むことができるだろう。一方で、悪い笑いを取り入れている教師は、子どもたちの心を傷つけ、生徒指導をすることが難しく、授業を進めるのに苦労することが予想される。

アンケート・インタビューを通して、学校で笑いを上手く扱うためには、教師としての強い力が必要だと感じた。授業力があって初めて、児童のさまざまな回答に笑いをもって上手く対応することができる。そして、生徒指導力があって初めて、児童の人権を侵さない笑いを起こすことができる。また、ユーモアを持って子どもたちと接することが大切だろう。柏木(2009)は、「ユーモアから新しい視点を提供することもできますし、優れたユーモアセンスを示すことで、人格的に高く評価される場合がある。逆につまらないユーモアセンスを示すことで人格的に低く評価される場合もあります。これもユーモアが持っている両面性といえますか、両刃の剣といえますか、そういうところがあるようです。」と述べている。また、大島(2009)は、「不調和理論にあるように、通常の状態から逸脱し、期待をそらすことによってユーモアが生じるということは、通常の状態を認識していない限り、ユーモアは成り立たないものである。通常の状態を認識しているということは、その社会や文化や言語を熟知しているということである。」と述べている。

以上のことから、教師がユーモアを持って子どもに接することは重要だが、そのためには、子どもの文化を熟知する必要があるだろう。日頃からの、子ども文化の研究が必要になると感じる。

笑いが無い学級をつくっていくことも可能だろう。ただ、そのような指導は、学級の統制を教師主導にしやすくなる一方で、児童主体の学級をつくることは難しくなることが予想される。また、厳粛な雰囲気、笑いを許さない雰囲気はその場を支配する秩序を絶対的なものと見なし、その秩序と一体化することを求めている。しかし、組織や秩序を発展させるため、また、何か新しい視点を創り出すためには、既存の秩序にしたがわないものの存在、すなわち笑いを常に許容しておく簡潔さが不可欠であると感じる。したがって、自主性が求められるこの時代において、笑いのない学級経営を行うことは、「ハイリスク・ローリターン」の学級経営になると考える。

子どもたちにとって良い笑いを取り入れながら学級を経営していくのは難しい。教師としての技量が試される。実際、私が教壇に立った時、子どもたちをピクリとも笑わせることができなかったり、余計なところで笑わせ、授業を上手く成立させることができなかったりした。し

かし、笑いを取り入れ、子どもたちを自主性育むことは、将来、子どもたちが国際社会で戦っていくために必須だと考える。だからこそ、教師自身が、笑いを取り入れることを恐れてはいけないだろう。

ただ、忘れてならないことは教室での笑いは、授業・生徒指導を進めるためのスパイスであり、本質ではない。しかしながら、料理と同様に、そのスパイスがあるからこそ指導は引き立つだろう。より良い指導を行っていくために、子どもたちにとって良い笑いを提供し続けることが、教師の仕事の一つではないかと考える。

引用参考文献

- ・井上宏：笑いの人間関係、講談社、54、1984
- ・中島英雄：脳を活性化する「笑い」の力、小学館、86-91、2007
- ・大島望巳江：高コンテクスト社会と低コンテクスト社会のコミュニケーションにおけるユーモア、笑いの世紀、日本笑い学会、318-331、2009
- ・柏木哲夫：癒しのユーモア - いのちの輝きを支えるケア - 、笑いの世紀、日本笑い学会、104-113、2009
- ・志水 彰、角辻 豊、中村 真：人はなぜ笑うのかー笑いの精神生理学、ブルーバックス、110、2009
- ・大崎素史、矢島信男：教師のコミュニケーション能力と笑いの効果に関する考察、教育学論集第 62 号、59-67、2011
- ・白石よしえ：なぜ予備校の教室には「笑い」が必要か - 笑いが予備校での学習に効果をもたらすメカニズムを動機づけスタイル理論 反転理論から考える、128-140、2012